

---

# 三時のお茶をご一緒に

縞白

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

「」のPDFファイルは、「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

三時のお茶を「」一緒に

### 【著者名】

N7166R

### 【作者名】

縞白

### 【あらすじ】

からり、からりと風車がめぐる。「」は廻町。人とモノノケと神さまが、縁側で一緒にお茶を飲むところ。風車のように風の向くまま気の向くまま、モノノケ達とのんびり暮らす娘さんのお話。

夜は冷えるが、晴れた日のお匂はすこし暖かくなりはじめた今日この頃。

日本のどこかにある嵐町の片隅、藤城家の廊下で、古びた柱時計が三回鳴る。

お茶の間で急須に茶葉を入れる鞠子の背中へ、とてとてと歩いてきた少女がぽふつと抱きついた。

慣れた鞠子は驚かず振り向いて言ひ。

「すずちゃん、今お茶いれるから、縁側で座つて待つてくれる？」

赤い着物に金の帯、艶やかな黒髪に青い石をはめた金の簪かんざしをさした可愛らしい少女「すず」は、ちょっと間を置いてからこくんと頷いて縁側の方へ歩いていく。

ちいさな女の子にしか見えないすずは、古くから藤城の家に棲む座敷童子ざいけどうじだ。

鞠子は彼女の世話役として雇われている分家の娘で、高校卒業後にすずのいる藤城本家で暮らすようになり、今年で三年が経つ。

藤城家では座敷童子を「一族の守り神さま」として大事にしているので、すずの姿を見て話ができる鞠子も「お世話役さま」として

一緒に大事にされていた。

嵐町にはモノノケも神も「ぐ当たり前に現れ、人々は彼らに慣れ

ている。

しかし、なかには「自分の気に入った者にしか姿を見せない」という、少々気難しいものがおり、座敷童子もそうだった。

鞠子の前の「お世話役さま」が役目を降りると、すずは五十年近く人に姿を見せなかつたというから、何を基準に選んでいるのかは分からぬが、なかなか厳しいことである。

そんな鞠子の仕事は、「すずの相手」と「家事」、「たまに帰つてくる藤城家の当主さまのお世話」の三つ。

すずは人間の子どもと違つてほとんど手がかからないし、当主さまは一ヶ月に一度くらいしか帰つてこないので、主な仕事は自分の生活を維持するための家事だ。

ちなみに「一族の守り神さまのいらつしやる家」には「お世話役さま」以外、当主とその妻子だけが住む、という昔からの決まりがあるため、藤城家の他の人々はこことは別の家に住んでいる。

が、今の当主さまは独り身で、しかも藤城が家族経営する会社の社長として本社近くのマンションに寝泊まりしているため、ほとんど本家に帰らない。

鞠子にはそれが、すこし寂しい。

「当主さま」が「次期さま」だつた頃から彼を知る鞠子は、きっと仕事が忙しいんだろうな、と理解はしていたが。  
落ち着いた低い声で「ただいま」と言つ彼をずっと、心ひそかに待つてゐる。

ともかくそんなわけで、現在の藤城家はすずと鞠子の一人住まい。鞠子は日々のんびりとすずの相手をして暮らしているが、最近になつて、すずの元を訪れるモノノケのお姫さま達のおもてなしも、よくするようになつた。

「すず、鞠子さん、お邪魔するよ。」

「鞠子、遊びに来たぞー！」

「すずちゃん、まりちゃん、こんにちは～」

鞠子が三時のお茶をいれはじめると、どこからともなく次々と現れるモノノケ達で、藤城家の縁側はとてもにぎやかになる。純和風なお屋敷の藤城家は庭が広いので、元気のよい者たちはぱたぱたとあちこちを走り回りながら、顔を上げた鞠子に手をふつた。

「はーい、こんにちはー」

こたえて手を振り、鞠子はお茶をいれた湯のみと草もちを山積みにした菓子器を縁側へ運ぶ。

すると尻尾が二股にわかれた猫や、頭にみどりの葉っぱを乗せた少年たち、獣のような眼をした青年や、ふわふわと空を歩くようにたわむれる少女たちが集まってきて、鞠子からお茶と草もちをもらい、それぞれのお気に入りの場所へ座つた。

訪れた者たち皆にお茶と菓子が行き渡るのを見届けると、鞠子もすずの隣に座つてお茶を飲んだ。

その隣に早々と草もちをたいらげた青年が座り、一緒に遊ぼうと鞠子を誘つ。

彼がトランプを持つているのを見た子供姿のモノノケ達がわらわ

「うと寄つてきただので、鞠子は階にカードを配つた。

そしてさあ、遊ぼうか、といつ時に。  
ふつと階が空を見る。

「どうしたの？」

不思議に思つて一緒に空を見あげた鞠子は、青い空を渡る白い雲の中からぬうつと大きな手が現れ、庭へ向かつておりてくるのに田を丸くした。

冂町の住人として、奇妙なものには鞠子も慣れていたが、さすがにこれには驚いた。

鞠子の周りのモノノケ達があつといつ間に姿を消し、縁側には鞠子とすずだけが残される。

あむあむとのんびり草もちを食べるすずの横で、鞠子は内心どきどきしながらその手の行方を見守つた。

人と同じ五本の指のあるその大きな手は、藤城家の庭に指先が当たると下つのをやめ、ゆっくりと鞠子とすずの傍へきて動きを止めた。

「もし。童子の隣のお人や。わしにも茶をもらえんだろうか？」

どこからともなく穏やかな男性の声が響き、鞠子は雲の上を見あげて「ああ」と理解した。

すずは草もちを食べるのに夢中で無反応だが、じつやら彼女のお知り合いだ。

ならば藤城家のお客さまである。

持つていたトランプを縁側に置いて、鞠子は急須の置いてある茶

の間に戻りながら答えた。

「はこ、お密さま。今いれてまいるますので、どうかすこしお待ちください。」

「ふふ、密か。お小さい方、わしは密には大きすぎような。」

「お密さまに過ぎるも足りぬもありません。ここには小さな湯のみしかござれませんが。」

「よこよこ。わしはそれが欲しいのだ。」

ならば良からうか、とそのままで回し湯のみに茶をいれ、鞠子は草もちを持つて縁側へ戻る。

するといつ之間にか草もちを食べ終えたすずが手を伸ばし、大きな手の指先に触れて、仔犬にするよじよじよしと撫でていた。

「久しいなあ、童子や。此度いたびはまた、良い巡りに逢えたようだのう。」

「

「こへん、と頷いてすずが答えた。

「このはね、まりー、とこりの。」

「ふむ。まりー。」

低い声が言つと、すずはまた、こへん、と頷く。  
そして金の簪をしゃりつと鳴らし、ちこちこ首を傾げて訊いた。

「また、いくの？」

「ああ、また行くよ。わしの役田は変わらぬもの。南から北へ、風を連れ。」

声がやみ、すずが振り向く。

鞠子は大きな指の上へ湯のみを置き、草むらをそえた。

「お待たせしました。よろしければ、」一緒に草むらをひいづ。「

「おお。ありがと、まつー。」

ちいわく一礼して、鞠子はずすの隣へ座る。

大きな手はゆっくりと空へ戻り、不思議と静かな昼下がりの陽射しのなか、座敷童子と人の娘はただ縁側に座って、さやさやと風が庭木を揺らすの眺めていた。

しばらじして大きな手がまたおりてくると、鞠子はその指の上にある小さな湯のみを受け取った。

「良い茶であったよ、まつー。童子や、また時の巡りに会おうな。

空へ消えてゆく手を見送り、すずはひらひらと手を振る。

鞠子は湯のみを手に持ったままぼんやりとしていたが、どこからともなく現れた猫が言ひのに我に返つた。

「おや、五色雲だ。鞠子さん、渡り神に気に入られたね。また風の変わる頃、おいでになるかもしれないよ。」

「え？ 本当？ もしいらっしゃるなら、もつと大きな湯のみを用意しておかないと。」

一股尻尾をふりふりと揺らして、猫はおかしそうに笑つた。

「いや、鞠子さん。それは要らないこと思つよ。渡り神は、茶を飲んだのではないからね。」

「でも、お茶がほしことおっしゃつたけど。」

「渡り神が飲んだのは、鞠子さんがその湯のみにいれた思いやりだ。」

湯のみの大きさも茶の量も、さして関わりないんだよ。」

「・・・そうなの？」

鞠子はよくわからないと首を傾げ、ゆっくりと空を流れゆく、五色に輝く美しい雲を見た。

その隣にひょこと現れた青年が、鞠子の手にした湯のみを覗き込んで言つた。

「もうじき桜が咲くな。」

からになつた湯のみの底に、薄紅色の花びらが一枚。

思わず頬をゆるめて「そうね」と頷いた鞠子は、その花びらをすずに見せて言つた。

「すずちゃん。桜が咲いたらお弁当を作つて、お花見に行こうか。

すずは鞠子を見あげて嬉しそうに笑つと、じつへつと頷いてこたえた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7166r/>

---

三時のお茶をご一緒に

2011年4月7日19時58分発行